# おちほ

第69号　平成23年3月10日　発行　　社会福祉法人　椎の木会　落穂寮　発行者　中嶋　貴一郎

## 天（そら）からのお客様

## 年末は『大雪』　年始は『福郎』

## あけましておめでとうございます

皆様、旧年中は大変お世話になり、ありがとうございました。

今年も、昨年同様よろしくお願い致します。

さて、昨年は記録的な猛暑で、年末恒例の漢字も「暑」（あつい）の字でした。利用者さんへの影響もあり、八月は熱中症で救急搬送した方もおられました。九月に入っても暑さは続き、十月になって夏の疲れが見られた方もあり、体調管理が大変でした。

ところが、そんな記憶も吹っ飛ぶような今冬の大寒波。年末は天からのお客様《雪》であっという間に三十センチほどの雪が積もり、予想外の大勢の来客に利用者さん、職員ともに喜んで、ご覧の力作が完成しました。

雪でシンと静まり返った中、新たな年を迎えた平成二十三年一月三日。今年一番の年始挨拶に来られた方は、なんと《フクロウ》。落穂寮事務所の玄関で職員の出勤を待っておられました。現在ではフクロウは《福郎》又は《不苦労》とも表し、福をもたらす遣いと言われています。

しっかりと《福》を招き入れられるよう、利用者中心を原則に支援提供していきますので、皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

# 涙した「かれ」の帰還

理事長　山下陽一

## ロボットになみだ、なぜ？

二〇一〇年六月一三日、宇宙空間を七年間六〇億キロ航行した「はやぶさ」が地球に帰ってきました。試料搭載カプセルは本体から分離され、オーストラリアの砂漠に着地し、「はやぶさ」本体は大気圏に再突入し高温の摩擦熱で光を発しながら燃え尽きました。

この様子はインターネットで同時中継され、多くの人々に深い感動を与えました。科学の最高水準の知識を持ったエンジニアたちで制作され運用された高精度の工学実験装置の地球帰還に、なぜ多くの人たちが感極まる様子とともに「おかえり、ありがとう」という涙ながらのメッセージを寄せたのでしょうか。

世界初の試みである惑星に着地してサンプルを持ち帰るというプロジェクトの責任者の川口淳一郎さんは、「はやぶさ」は「成長した自分の子どもが帰ってきたようで、とても機械とは思えない」と述懐しています。はたして、あのプロジェクトに何が起こっていたのでしょう。

## 「はやぶさ」と命名する

この計画は順風満帆で進行したものではありません。アメリカの宇宙開発は軍事技術の開発も相まって、日本の十倍という比較にならない予算と人材が確保され、日本の技術レベルはNASAに比較すると圧倒的に遅れている現実がありました。その中で世界初の惑星探査のプロジェクトを成功させなければならないという緊張感を伴った計画でした。

全長約五〇〇メートルの小惑星「イトカワ」に着地してサンプルを採取し地球に持ち帰る探査機の愛称は隼（はやぶさ）で、鋭い目でまっしぐらに飛んで狙った獲物を逃がさない、というイメージはまさにそれにぴったり。ローマ字と数字を組み合わせたコードネームより、この名前で報告し連絡しあう方が、生きものとして活躍することを感じさせる大きな役割を果たしたということができるかもしれません。

## 自律の性能がある

コンピュータはすべて「A条件のときには、第一プログラムを実行せよ」、「B条件のときには、第2プログラムを実行せよ」と組み込まれたプログラムの内容に応じて作動するだけの装置だ、といえばそれまでなのですが複雑なプログラムを組み込んでおけば、まるで考えながら動いているように見えます。目標とする星は3億キロも離れているので、管制センターから信号波を発信しても到着まで十五分かかる距離にあります。着信後状況を示す返信の信号も十五分必要ですから、センターへの到着は三十分後になります。このようなことから「はやぶさ」の様子をモニターで見ながらリモートコントロールすることができません。秒速三十キロで軌道を飛ぶ天体にタッチダウンするのですから、自分の位置と姿勢を判断しながらタッチダウンを行わなければなりません。これらの自律動作を行っていることも、「はやぶさ」が一生懸命がんばっている生きものとして更に実感させたのでしょう。

川口さんにとって「はやぶさ」が「イトカワ」へ接近する時の写真を送ってきたことを「子どもがテストの成績を自慢するように送ってくれた」と述べています。もう、機械ではないのです。多くの人たちの期待を背負った生きものになっているのです。このあたりについて川口さんの筆は熱く語っています。

## 息絶えだえの「かれ」を、地球へ

精巧な装置ほど故障の確率は高くなるのでしょうか、深刻なトラブルが発生すると「かれ」の運行に致命傷を与えてしまいます。電気回路や噴射システムの故障、燃料漏れによる被害は二次、三次被害へと拡散します。まさに満身創痍で息絶えだえの状態に陥りました。

宇宙空間にただよっていて、地球からの弱い電波の語りかけをひたすらひとりで待っている、瀕死の孤独な子どもがかすかな声を発して地球に帰ろうとしている。そんな状態の「かれ」を何とか地球に帰還させたい、と川口さんをはじめ運行スタッフ全員がその目的に一意専心します。

そんな中「はやぶさ」にどうしても説明できない不可思議な現象が起きていて、奇跡を実感したというのです。その一つとして、電子回路の復活がありました。管制室から指令を出したわけでもなく、プログラムに書き込まれているわけではない。「誰がスイッチをオンにしたのか？」作動の原因を探ったが判らない、スタッフはますます機械装置を越えた生きものとしての「かれ」を感じるのです。

## 「はやぶさ」がくれた自信・希望・勇気

川口さんにとって、「はやぶさ」は「壊れかけた機械」などと、とても思えない特別な存在でした。その「かれ」が大気圏に再突入し、光の尾を引いて燃え尽きる様子は見るに耐え難いことでした。研究室でひとり涙を何度も拭いながら七年間を共に過ごした、波乱万丈の生涯の「かれ」の最後を見届けたのです。そして「かれ」の子どもとも思えるカプセルをオーストラリアの砂漠に無事着地させて、長期にわたる困難なミッションを終わりました。

運行中、故障、行方不明などによる運行打ち切りの不安にさらされながら、このミッションを期待以上のゴールに導いてくれた。

川口さんは最後に哀惜の感慨をこめて次のように締め括っています。

「はやぶさ」はどんな状況下でも、自信と希望、そして失敗を恐れない勇気を与えてくれた、と。

（二〇一一・一・二〇）

図書紹介　川口淳一郎著
「はやぶさ、そうまでして君は」
（宝島社）

# 石部での四十年余りの時の流れに思う

施設長　中嶋　貴一郎

去年の異常な暑さの夏がはるか昔のように感じられる今年の冬の雪の多さと厳しい寒さは、予測不能な自然の力を痛感させられますが、新しい年を迎え、私たちの施設を取りまく環境も、この一年間の自然界の厳しい環境と変化のように、これからどうなっていくのか予測できない状況と激しい変化の中にあります。これからの生活施設は多様な形を求める中で、地域の方々と連携をとり、いかに地域に根ざしていくかが大きな鍵となっていくと思われます。

先日、ある研修会で発題をさせていただく機会があり、落穂寮が石部の地に移転してから、地域の中で施設が認知され、根ざしていったか、さらに障がいのある人への理解を深めていただいたかを、四十余年にわたる取り組みについてお話させていただきましたが、その発表原稿を書きながら、私が関わった三十八年を一つ一つ思い返していました。

今から三十八年前は、障がいのある人に対してはほとんど理解していただけない社会情勢で、施設を利用している子供たち（当時）は、地域を追われた人、あるいは地域で学校教育を受けられなかった人等がほとんどでした。施設で働く職員も、親、家族、親戚に反対されてきた人が多く、中には夜逃げ同然にして家を出て来た人もいました。障がいがあるということばかりがクローズアップされ、その人個々の人間性を見つめてくれる人は少なかった時代でした。そういった状況の中で、落穂寮をはじめ、石部地域に在住している五つの施設が、大津から移転してきました。当時は施設から外へ出る時はいつも周りを気にしながら、そそうの無いように配慮しながらの毎日でした。常に好奇な視線を痛いほど感じていました。そこからの出発だったと思います。

どうしたら落穂寮の存在を認めていただけるのか、どうしたら落穂寮が石部地域の一員になれるのか、私たち職員は毎日考えたものです。時には激論を交わしました。結論は、「けして施設の中にこもらない、何があっても外へ出よう」でした。毎日、顔をあわせることで変わってくるものがあるはずと感じたからでした。「理解してください」ではなく、私たちが地域の人とかかわり、地域の中に入っていきましょうという事を申し合わせたものでした。職員が地域の集まりや行事に参加し、地域のサークルに参加する事で、次第に顔見知りとなり、親しくなっていき、逆に地域の人が施設にきていただくようになりました。老人クラブの有志の方々が毎月ボランティアに来てくださったり、小学生、中学生がボランティアや交流で来てくださる機会が多くなりました。私たちも本当に嬉しかったですし、利用者の人も本当に嬉しそうでした。老人クラブの有志の方々には感謝の気持ちを忘れた事はありません。

移転から四十年余り経った今、石部地域は障がいのある人に優しい街といわれるようになりました。何が変わったのか、それは、障がいという言葉の壁を越えて、障がいのある人に対して、その人の人柄を受け止めていただけるようになった事ではないかと思います。日常の中で、自然に挨拶が交わされ、言葉をかけていただく場面が多く見られるようになりました。四十年余りの時の流れと、それぞれの人の取り組みが懐かしく感じられます。

近年、「障がいのある人は、施設を出て地域で暮らそう」という論が声高に叫ばれていますが、その事に異を唱えるつもりはありません。むしろ私たちの願いでもあります。ただ地域で暮らすハードルの高さを、石部地域の四十年余の取り組みの中で痛感しています。地域の中で暮らすためには何をなすべきか、改めて考えてみる必要があるのではないかと思います。「障がい」という言葉のレッテルが剥がれ、「障がい」という言葉がなくなる日がくることを望まずにはいられません。

研修会の発表原稿を書きながら、石部での四十年余りの時の流れを思い返し、いろいろな事を思い巡らせてみました。

# ♥２０１０年クリスマス会♥

今年も待ちに待ったクリスマス会が行われました。この日は、利用者さんだけではなく職員もドキドキ・ワクワクでした。
このクリスマス会を楽しい思い出にして頂くために職員全員が毎晩準備や出し物の練習をしてきました。

**ー　昼の部　ー**

- ●ランチ
- ●お楽しみ
  - ・音楽
  - ・パフォーマンス
  - ・有志
  - ・ダンス

**ー　夜の部　ー**

- ●キャンドルサービス
- ●プレゼント渡し

Merry Christmas

## ●ランチ☆装飾●

いつもの食堂からガラリと変わり、キラキラ輝く電飾やステンドグラスに囲まれホームパーティーの様な雰囲気でのお食事になりました。
豪華なランチをウエイトレスさんが運んで来てくれ、みなさんとてもおいしそうにペロリと完食しておられました。

## ☆ハンドベル音楽

息の合った職員のハンドベルにみんなも、うっとりされておられました。

## ☆ソング

職員三名による歌をきいて、利用者さんも一緒に歌い、最後にはみんなで大合唱になりました。

## ☆パフォーマンス

今年のパフォーマンスはダンスバトル。利用者さんもドキドキハラハラで見ておられました。

## ☆有志ダンス

かわいらしい女性職員二人によるピンクレディー。歌い出される利用者さんもおられました。

## ☆ダンス

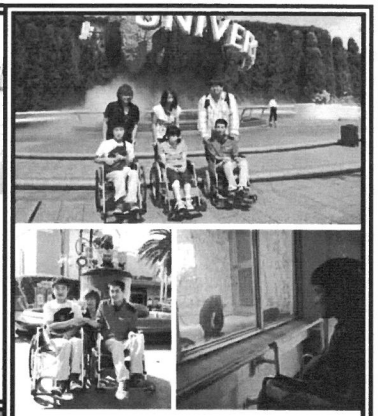
アンパンマンマーチの音楽に合わせて職員も利用者さんも一緒に楽しくおどりました。

## キャンドルサービス＆プレゼントわたし♡

夕食の後は、キャンドルサービスと皆さんお待ちかねのケーキ。
テーブルに配られるケーキに皆さん目がない様で美味しそうに食べられていました。
そして最後は、一番のお楽しみ。サンタさんの登場です。名前を呼ばれると嬉しそうにサンタさんからプレゼントを受け取っておられました。来年も皆さんの笑顔を見に来て下さいね！

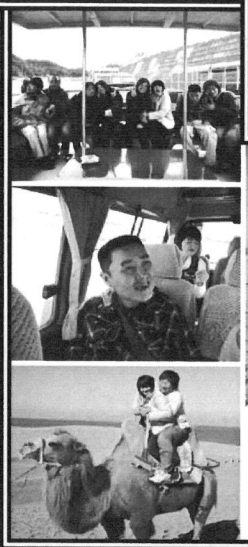
# H22年度リフレッシュ旅行

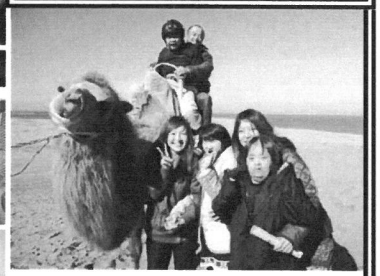
桜さん、香代さん
個人旅行
in 東京ディズニーランド
2泊3日
11月9日→11月11日



夏美さん、じゅんさん、崇史さん
個人旅行 in USJ
9月16日→9月17日

弘明さん個人旅行 in 京都 11月24日





ドライブ班 in 鳥取
11月18日→11月19日

ライオンバス班 in 白浜　10月28日→10月29日

海水浴班
in 鳥羽
9月2日→9月3日

体験班
in 鳥取
10月18日→10月19日

工場見学班10月18日→10月19日

祐子さん、千春さん
個人旅行 in マキノ
10月28日

由紀子さん
個人旅行
in 北海道
9月28日→9月30日

## タイガーマスク参上!?

年末から年始にかけて、世間では〝タイガーマスク〟が全国各地に現れて大変な話題になりましたが、なんと落穂寮にも12月11日に登場！しかもこの〝タイガーマスク〟毎年落穂寮に来て下さるのです。その正体はＮＥＣ労働組合のみなさん。今年も落穂寮に〝新しい明かり〟を届けにランプ交換に来て下さいました。新年を明るい光の下で迎えることができるのはこのランプ交換のおかげです。蛍光灯の交換から照明器具の手入れまでしていただきありがとうございました。また来年もヒーローの登場をよろしくお願いします。

## バースデーパーティーin女子棟♡

12月5日、女子棟メンバーで食堂にてバースデーパーティーをしました。

今回は、真由美さんと祐子さんが誕生日を迎えられました。

常にニコニコされている方や、バースデーの歌を歌うと体をゆらして自分の誕生日を祝われて喜ばれたりして、楽しまれていました。

素敵な一年になるといいですね。

## ☆男子棟おやつづくり☆

1月のおやつづくりは季節にちなんでおはぎを作りました。もち米とお米を合わせて潰し、焼いてあんこやきなこをつけて食べました。利用者さんたちは潰すのを一緒に手伝ってくれました。みなさんおいしそうに召し上がっておられ、あまり噛まずに召し上がられる方が多く、おはぎはあっという間に無くなりました。月に一度のおやつづくりということで、みなさんとても楽しそうに取り組まれておりました。

## 泉

▽平成二十三年四月から、生活介護事業の定員を五十名から六十名に増員します。入所利用五十名の方の日中支援に加え、地域で生活されている在宅障がい者の日中活動を支援させていただくことで、これからも地域で生活していくことができるよう支援をしていけたらと思っています。

新たなサービス提供に伴い、たくさんの問題も発生してくることと思います。

つきましては、今後、皆様のより一層のご指導ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## 木言（こと）

誰かのために在るのではなく自らの意思でここにつ。
しかし、ここに在り続けられるのは、
だれかが想い、支えてくれるから。
だれかに
「支えたい」
と想われる
そんなふうに生きていますか。